



若者向けの雑貨店やライブハウスが立ち並ぶ大阪・ミナミのアメリカ村(大阪市中央区)。酔客らが行き交う夜、雑居ビル3階の奥まった小部屋で、20代の女性社員がぼつりとつぶやいた。「職場にいるとどついても落ち着かなく、不安な気持ちになってしまふ。私はずつ病なのではないか」。昼間は表に出せない、心の内を吐き出す。

**半身まひと闘う**

精神科医、片上徹也(かたかみ・てつや、32)さんが落ち着いた声で女性に語りかけ、一つ一つ悩みを聞き出していく。「ストレスは誰にでもあること。これからゆっくりと話し合っていきましょう」

# 夜のアメリカ村 心の隠れ家

## 不安に寄り添いじっくり診察



「女性ほんの少し、メリカ村に夜間しか開かいたのは2014年7月。安堵の表情を浮かべた。若者や働く世代に向き合おうと、片上さんがア

リニック(同区)を開かない人々の駆け込み寺に、との思いを込めた。

両親とも医師の家庭に生まれ、少年時代はサッカーやテニスに打ち込んだ。高校時代に精神科医の和田秀樹氏の著書と出会い、人の心を読み解く技術に憧れて同じ道を志す。スポーツを続けながら受験勉強に力を入れ、医学部に合格。研修に励む傍ら、夜間の診療所を開業する構想を温めた。

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

### 一足のわらじ

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

「開業なんて無理かもしれない」。夢を諦めかけた時、支えとなったのが大学やスポーツの仲間だった。懸命のリハビリに日々付き添い、励まし続けてくれた。意を決して「こんな自分だから、できる治療もある」と開業へ。仲間が必要な備品を代わりにクリニックへ運び込み、無償のボランティアスタッフとして運営を手伝った。

写真 尾城徹雄  
文 岩沢明信